

シベリア抑留生活の一齣

秋田県 藤 盛 定 芳

はじめに

私の戦争体験は昭和十六（一九四一）年五月より関東軍情報部ハルピン陸軍特務機関に軍属として勤務し、昭和二十五年四月十七日舞鶴港に上陸するまでの生活です。この度は昭和二十年八月十五日終戦日以降の行動記録の一部とシベリア抑留生活の一端を記載致します。「平和の礎」の一齣ひとしほまとなれば幸いです。

私は大正十四（一九二五）年九月二十五日秋田県北秋田郡花岡町の貧農の家に生れ、当時の家族生活は厳しい状態であったと祖父から聞いております。何しろ所有する田・畑・山林は少なく、百姓一筋の生活は当然のことです。

幸いにも当地は鉱山町でありましたので、私の少年時代には父母共々、鉱山の世話になりながら、

それなりの生活ができ、一家「団らん」の日々でありました。

私が花岡尋常高等小学校を、昭和十五年三月卒業しました当時の当校は千二百〜千三百人で教職員は三十六〜三十八人と記憶しています。またその規模は県下でも同等クラスの学校は多くないと聞いていました。

当時この町の主たる産業は農業と林業、そして鉱山業でした。戦時中であり、金、銀、銅、鉱など、最も必要とされる金属類でありました。会社側も生産には最大の努力をしたと思います。一部の人の話では、国の方でも生産増強の話があったとか？ 分かりませんが……

お蔭様で町当局も町民も大きな恩恵をうけたと思います。他の町村に比べて余裕のある生活だったと思います。

私は同年四月北秋田郡立扇田準備場へ入学し、翌年三月卒業しました。今度は更なる学校への進学か、それとも就職を求めるか？ であった。

しかし、我が家の現状から考え、進学は考えられず就職の選択が「ベスト」であることを父母に相談して同意されました。

学校教育も戦時中のためか、歴史の時間には必ず戦争の状況が話されました。当時は紀元二六〇〇年祝賀とか、日独伊三国同盟とか、第二次世界大戦などなど、私達青少年の心には我が日本国を守る。神の国を守るのムードであった。

私は就職先を決めるため、思案の毎日であった。しばらく思考の結果、私の叔父が満州国ハルピン市に暮らしていることは承知していたので、早速相談した結果、軍属として軍人らしく働く気があれば引き受けるとのことであった。

当時、叔父は関東軍情報部ハルピン陸軍特務機関の主計課に勤務していました。叔父は渡満前は青森県弘前市の第八師団司令部に在籍して、陸軍准尉でした。

早速、履歴書など必要書類を送り返信を待っていたところ、四月中旬、採用の内諾を得たとの書

類を頂いた。そして五月中旬までにハルピンに来るようにとのことであった。

昭和十六年五月五日、叔父が特別休暇にて帰省していたので五月十八日当地を後にして北満の都市ハルピン市へ叔父と一緒に出発しました。そして昭和十六年五月二十四日付けで関東軍情報部ハルピン陸軍特務機関に採用されました。

昭和二十年八月十五日停戦命令を受け、ハルピン市内の警備を担当し任務を終え、牡丹江市内の捕虜収容所に集結した。

ソ満国境を通過したのは忘れもしない昭和二十年十一月三日であった。その時、警備に当たったソ連兵は口癖に言った言葉は「ダモイ・トウキョウ（東京に帰る）」であった。そして私達は貨物車に乗せられ、一路ダモイ・トウキョウを信じて列車の内で眠りに着いた。

夜が明け、小さな貨車の小窓から朝日が入り始めた。窓から見える風景は未だ見た事のない謎の国、別名「赤の国」と言ったソビエト連邦社会主

義共和国であった。いわゆるソ連だ、シベリアだ。

列車は山沿いに曲りくねった線路を走っている。沿線にはポツリポツリと小さな集落があり、未完成の大工場らしき建物もあった。沿線の平地はほとんど湿地帯と見られた。また白樺や落葉松の様な樹木が一面に生えていた。これが生れて初めて見る異国の地、シベリア鉄道の一部の実態であった。

かくして、来る日も来る日も貨車の中の生活である。途中下車は、何時間かあったが、それは用便を足すためである。

シベリアの風は冷たい、十一月も初旬である。ダモイ（帰る）希望は、貨車内ではダモイ・トウキヨウの言葉は消え、不安と不信そして、疲労の顔々であった。

しばらくしてから貨車が止った。しかし貨車は前後に移動しているようだ。今度は本当に止った。いよいよ来る所に来たと観念した。車内は静かになった。輸送指揮官より命令が出た。

大隊長が「三、四中隊全員下車し隊列を作れ」とのことである。五百人である。残った我々兵士達も下車した。

前方を見ると収容所らしい建物があり、望楼のような物が五カ所ぐらい見えた。周囲は鉄条網らしく、箇所ごとに丸太木が立っていた。衛兵所らしい建物もあり、下車した五百人の落ち着き先は、あの建物と想定された。

五百人の兵隊達は装具を背負い整列している。間もなく警戒警護のためのソ連兵十人ほど、着剣した状態で来た。行軍が始まった。ソ連兵は前後左右に着いて歩き始めた。彼らの眼光は鋭いものであった。

ここで戦友五百人との別れに数十分かかった。お互い健康を誓い合った。五百人のその後の行動や消息については知る由もなかった。

残った五百人の内、若干の人達で貨車より糧秣卸しを行い三時間ほどで終った。もう夕方である。また貨車の中へ。発車時間を待つ身となったが、

不安が募り、どこへ、どんな仕事か、銃殺されな
いだろうか……気が滅入り込む。暖房のため積み
込んだ燃料も後二日ぐらいで無くなりそうだ。寒
気は日増しに厳しくなるシベリアの地である。

貨車が動いた。更けゆく夜を西か東か不明だが、
ともかく高速で走ってる事だけは分る。翌日も貨
物列車は走る。車窓の隙間風は、シベリア吹雪が
「ヒュウ」「ヒュウ」と車内に入ってくる。扉や
貨車の板は鉄鋌で止めている。鉄鋌の先端は真白
になっている。(熱伝導のため)

もう一週間以上も貨車生活が続いた。座ってば
かりで、足・腰・尻が痛い。何とかしないという
状況になってきた。今まで動揺していた兵士達は
諦めムードである。

強制労働も覚悟したのか「ダモイ」の話はなく、
いかにして帰国の日まで過ごすかで思案に苦しん
でいるようだ。もちろん私も同様であった。

翌日いまだ薄暗いのに、列車は止ったり動いた
りしている。不思議に思っていたら今度は本当に

止った。列車は引込線上に静止している。ここだ。
ついに俺達の来るべき所に来たのだと直感した。

午前十時、下車命令が出たので、全員装具を取
りまとめて下車した。貨車内のすべての物品の取
り出しに約三十分ぐらいかかった。

百メートルほど前に収容所らしき建物が見える。
望楼も建っていた。周囲には若干の民間人の家ら
しき建物も見えた。

例のごとくソ連兵が十人ほど来た。今回将校も
同行していた。整列している我々は、どんな命令
が下されるか……心配である。

我々は編上靴でさほど冷たいと感じなかったが、
シベリアの冬は格別の寒さだと感じている。足の
感覚がなく鼻先が痛い。もう我慢ができない。隊
員皆が同じようだ。どこからともなく足音が聞こ
え、だんだん音が高くなり、今度は自発的に足踏
運動が始まった。「わっしょい、わっしょい」と
かけ声をかけ、足で地面を踏みつけるような状態
まで発展した。こんなところで作業をさせられた

ら俺達は寒さに負け、死ぬのではないかと思った。

打ち合せが終つたらしく、部隊は前進を始めた。前方に見える収容施設に向つての行進である。寒さは身を刺すごとくで強烈である。行進は数十分で収容所前に止つた。収容所長らしき将校が来て「皆さんに伝える。ただいまから全員の持物検査を行う。特に刃物は全部自発的に出して下さい。これだけです。直ちに検査を開始します。以上」と言つた。

五百人の検査には相当の時間がかかることは当然である。中隊長以下兵隊達も寒い寒い声である。早く済ませねばと、言葉の通じない者同志の検査である。身振り、手振りでのやり取りである。また数の中には狡賢い人間もいる。全員が終るのを待っている者は大変な苦痛である。終つた人、順番を待つ人達から不満の声が上る。「早く出してやれ」「捕虜じゃないか」「早くやれ」などなど、異口同音の声が片方から聞こえる。

余りの寒さに唇が紫色となり、身震いする者、

足踏みする者など、早く早くの声で大変である。

見るに見兼ねた収容所の幹部が話し合つていろいろだ。

間もなく終つた人達から順次入所させる事になつた。全員の検査が終つて部屋に入るまでの時間は約一時間と思つた。

所内には、食堂、炊事場などの建物があり、その他何棟かの建物があつた。その中には我々の収容所棟も含まれている。

大隊長、中隊長立会いで部屋割りが行われ、与えられた部屋に直行だ。しかし「火の気」なしである。ともかく薪運搬、部屋掃除など手分けしての活躍である。何よりも先ず「ストーブ」を炊く事であつた。ストーブも煙突も真赤になつた。火力のある白樺の新材である。部屋もだんだん暖かくなつてきた。と同時に人の存在を、そして人の顔を見るようになった。またストーブの周囲は黒山のように集つた人々がそれぞれの寝台に座つて居た。部屋内は寝台が二十個ほど並んでいる。一

個の寝台に四人で一枚の毛布が渡った。これで夜を過すのである。この先が不安である。

炊事勤務者の奮闘で昼食の飯上げの号令が出た。当番の同士が昼食を運んで来た。この事は食堂の設備ができてないので、居室兼食堂として使用することであった。私達は軍隊生活でもこのようなことは正常な生活と思つてさほど苦にならなかつた。しかしソ連当局はこれを認めず、一週間過ぎた時点で全員収容所の食堂を使用することになつた。

部屋内での食事時、不愉快なことがあつた。今までは下士官連中は「俺の飯は少しで良いぞ」と軍隊で言つていたが百八十度変つた。当番兵の食器への盛付に目が光るのだ。鵜の目鷹の目である。一さじでも多くなければ大憤慨だ。でも兵隊が急いで数十個の食器に手早く平均に分配することは非常に困難である。

ここでは兵隊も古年兵も下士官も、将校も皆同じでないか。「彼らはどんな人間なんだ」とつぶ

やきながら分配の仕事に懸命だ。

人間の本性とは、こんなに腐つたものか？

我々兵隊達はいつになつたら解放されるだろうか？ 全く奴隷とはこのような生活を送ることかと思ひながら、今日も終つた。

三日目の朝が来た。朝食後、当局からシベリア越冬用の物品支給が始まつた。それは襦袢、袴下、外套、帽子、靴、靴下などでした。が、しかし全員に支給されなかつた。不足分は後日となつた。

この分配方法もまた変つていた。偉い人達から順番に渡されるのである。従つて初年兵には残つた余り良くない品物が渡されるのである。常日頃は暇なく働かされても、分配はこのような状態であり、いまだに旧軍隊の階級制度が根強く残つてゐるからです。

このような生活が続くようであれば生きられる命でも到底「だめだ」と思うと、肩の力が抜けるようだ。

さて一日で一番楽しい時間はやはり食事の時

ある。しかし日本人の主食である白米の顔を見る
ことがない。主食は「コウリヤン」「粟」「燕麦」
や大豆などである。食糧も、被服も、生活環境も、
気候も皆、異なるのだ。異なる事も良いが、悪い
方に異なるのである。この様な生活が一週間も続
いた。また自分達の環境の整理も一段落した。が
今度は薪が無くなった。そこで毎日毎日、薪取作
業である。自活の作業が幾日も続いた。外気温は
日一日と下降するばかりである。午前中の作業は
三時間程度だが、寒さで大変だ、シベリア嵐が強
い。零下一五度は普通である。

ある日のこと、隣の収容所に行った。その時「ト
イレ」を借りた。ちよつと変だと思つて出会つた
人に聞いたら、兵隊ではないのだ。同じ日本人で
あるが皆さん偉い人達である。その収容所には将
校、見習士官、上は大佐級とか、更には外交官と
その家族、つまり女性もいたのだ。また二百人近
くのドイツ人もいるとか？ そして彼らも自活生
活の作業をしていると言つていた。彼らも北満よ

り入ソしたらしく、我々より若干早くこの収容所
に入ったとのことであつた。

十一月も下旬となつた。突然の指令が出た。

それは、ここより八キロ先方の山奥の伐採隊と
して行くことであつた。先発隊五十人で、人選は
主として希望者によることで決まつたのです。そ
して彼らには新品の防寒具が渡され、下士官を長
として、その日の夕方出発した。こうして戦友は
散り散りばらばらに分散してゆくのであつた。残
つた人達は例のごとく毎日の自活の作業である。

今度は身上調査の開始である。これは正式に俘
虜名簿に乗せるためらしい。この時は特殊機関、
秘密部隊の兵士及び関係者は、秘密保持のため、
報告書には偽名を使う、経歴はごまかし、でたら
めであつた。全く狐と狸の化かし合いの様であつ
た。

もう十二月となつた。厳寒で骨も凍ると言われ、
人間の住む所でないと言われたシベリアも、零下
三〇〜四〇度となって来る季節であり、体感温度

は更に強いのだ。

もう一カ月近くなった自活生活の作業をしている内にこの地の状況も幾分明らかになってきた。

ここは「ピラカン」と言う町で、戦争中は囚人達がここで伐採作業を行っていたそうだ。従って、ここは囚人部落であったとか。こんな話をしてくれた人は現在浴場勤務をしているソ連人です。彼は塩を盗んで八年の刑になったそうです。ただいまは服役完了し、給料を支給されているとのこと。

ソ連では囚人と言っても一定の部落で働いて糧秣から被服を支給され、良く仕事を言い、ノルマ（作業基準量）を遂行した者には金銭を支給したそうです。

また、転進命令が来た。今度は二百人だ。「ロンドコ」という町で、石灰工場とのこと。このため当所から百人行くことになり、中隊長には某准尉が決まり、その日の夕方に出発した。私も一緒だ。隣村の工場まで三キロ歩いて行くのである。山添いの道を一生懸命歩くのである。感ずる

のは寒さだけではない。強行軍の疲れだ。全行程の半ばを過ぎたころ「ロンドコ」より患者を乗せたトラックが来て停車した。

彼らは防寒外套を着ていたので、そこで彼らより外套をもらった。そしてまた、行軍である。間もなく私達を迎えに来たトラックに各人の荷物を積んで帰した。背中の荷物が無いので大分助かった。もう大丈夫と意気込んで、一路「ロンドコ」収容所へと歩き続けた。

途中「チヨプロオーゼロ」の町を通過した。聞くところによると、この町には日本人用の病院があるそうだ。夜間のため見ることはできなかった。町には工場を半分建てただけの物。学校や立派な官舎もある。町外れには孤児院もあるそうだ。戦争で父母を亡くした子供達を教育している所だ。この町の人達は一樣に整った服装で楽しく暮らしているとか。

ここを過ぎれば「ロンドコ」だ。峠に出た。見渡せば町が見える。電気の光で収容所内が煌々と

して明るい。二階建ての大きな建物二つが収容所施設だそうだ。これは今までの収容所とは別格だと思ひ込んで足早に行軍して行つた。

衛門所前に到着した。ところが衛門所前に私達の荷物が雑然と投げ出されている。何はともあれ自分の荷物探した。しばらく探したが飯盒がない、中の私物の一部がない、全く処置なしだ。飯盒がないと大変だ。隊長に届けると大変だ。付近に散在している装具の中から員数を確保した。こうして泥棒の生活も余儀なくされたのである。

一人が盗めば次から次と全体に伝染病のごとく拡大するのだ。こうしている内に人員点呼が始まつた。氏名を呼ばれた人は順次部屋に入るのだ。部屋は暖かだった。「ペーチカ（暖房器）」が良く始動していたのだ。夜間行軍でようやく床についた。もう夜中だ、十二時だ。割り当てられた寝台は四人一組で、一人当たり幅が二十センチである。しよせん無理な話であるが、それでも疲れているので眠つたが、どうして「眠つた」か、不明であ

る。だが寝苦しいので目が覚めた。隣の寝台の戦友も起きていた。彼が外套を見ている。私も自分の外套を見た。思わず「何だこれは」と叫んだ。

皆が寝ているのに失礼した。更に驚いた。それは虱の大軍ではないか。集団で移動している。何百匹か数えられぬくらいだ、大変だ。見ている内に身の毛も立ち、身体もザワザワしてきた。襟元付近は卵が真白になっている。何千個の虱の卵である。どうしてこんなになくさんの虱とその卵がと、想像する事もできなかった。もう寝ることはできない。取り急ぎ外套を部屋の外に出した。外気温度は零下四〇度はある。かくして今夜は明け方まで虱取りである。

こうしている間に二人、三人と起きた。とうとう三十人ぐらいが起きて虱取りである。私は「眠い」ので床下に陣取り、起床まで数時間の仮眠を取つたが起床の合図で起きた。

しかし飯上げは我々の番であり大仕事である。収容所人員が千二百人もの大世帯であるので、大

急ぎで自分達の部屋人員分の食卓を確保し配膳を
することである。これができて始めて朝食にあり
つけるのだ。

たくさんの兵隊がいたが、どの顔を見ても骨と
皮ばかりだ。肉付きの良いのは将校と下士官ぐら
いである。とほとぼ歩いてる兵隊達は今にも倒
れそうな歩き方である。人相も血の気がない人ば
かりである。人様の顔は良く見えるが、自分自身
も同様であるのだ。それでも我々の部隊は一般的
に良い体格であった。

七時三十分作業整列だ。伐採隊は三百人の大部
隊である。その地は少人数の班で数カ所へ分散し
て出かけた。第二十分所への作業へも行っている
そうだ。

大部隊の前後左右には、護衛と脱走監視を兼ね
たソ連兵七、八人が同行した。

今日は天気が良いが風が強い。シベリア嵐の前
兆だ！ 伐採隊は出発した。現場まで四キロ、徒
歩にて行くのだ。出発と同時に寂しい声で唄を歌

って行く足取りは重い！

作詞者は当地に来ていた某中隊長だとのこと、
その歌詞は

故郷離れて 幾千里

シベリア嵐は 身に沁みる

やがて花咲く 春が来る

このような生活が私達転属者にも来るのは目前
である。今日は見送りだが、明日は我が身だと考
えると、情けなく、明日からの生活が不安になり、
ただ呆然ぼうぜんとなり、伐採隊の行進を見ていた。かく
して転属した我々の部隊は翌日別棟の新しい部屋
に入りゆつくりと休んだ。

十二月末日は、故郷では餅つきであり、何かと
多忙な日々である。だがシベリア収容所では三十
日までは平常通りの作業であり、三十一日は半日、
所内作業で午後から年越の準備だ。指示通り作業
を終り昼食も済んだ。後は夕食飯上げ合図を待つ
だけとなった。

定時に夕食の合図が出た。皆が食堂へ急ぎ足で

行く。年越食卓のメニューに期待をかけてである。しかし期待は裏切られた。いつもの食器に盛られた物は量が若干多いぐらいだ。これは期待する方が間違っていたのだ。我々は俘虜なのだ、何も言うことがないのだ。これが正解かも知れない。

しかし将校連中は白米飯に魚がついたとか、一部の者は何かを飲んでいたとか？ 情報もあつた。真偽のほどは不明のまま。

生れて初めて年越しをしたシベリアは、寒さだけが身に沁みただけだ。何か得ることがあつただろうか？ 昭和二十一年の我々の生活はどうなるだろうか？ 考えながら眠りについた。もう九時だ、部屋の電気は消えた。